

会社は誰のために？

「100年に一度の危機」とは、アメリカの元FRB議長のグリーSPAN氏がリーマン・ショック直後に発言したものと記憶しています。これは、自身の政策ミスを覆い隠すカモフラージュともとれる発言と言えなくもないのですが、当時の麻生前総理を始め世間でも「100年に一度の危機」というのはよくささやかれています。「業績悪化も仕方がない」、「世間もみんなそうだから」、という言い訳には便利な言葉かも知れません。

さて、ここに来てギリシャを中心とした欧州の財政不安や朝鮮半島の緊張の高まりなど、新たなショックが金融市場を襲っています。為替では対ドル、対ユーロで円が急騰し、株式市場では世界同時株安が発生。リーマン・ショックから立ち直ろうとしている矢先の新たな金融危機の発生は、経済の立ち直りに水を差すもので、実態経済にどれだけ影響を与えるのか注意しなければいけません。2008年に続く2010年の金融危機、100年に一度どころか、2年に一度の危機といわなければいけないのかと思えるほど、世界経済は激動期にあります。

話は変わりますが、先日「日本でいちばん大切にしたい会社」という本を読みました。法政大学の教授である坂本光司さんが書いた1.2巻合わせて50万部を超えるベストセラーで、多くの読者が感動で涙を流した話題の本です。著者は現場で中小企業研究やがんばる中小企業の支援を目的に、全国6000社を超える企業の訪問調査を行い、その中で感じた真に正しい経営とは何かということを考え、前半では「会社は誰のために？」と題して、経営者が心すべき「五人」に対する使命と責任について述べています。

その「五人」とは、1. 社員とその家族を幸せにする 2. 外注先・下請企業の社員を幸せにする 3. 顧客を幸せにする 4. 地域社会を幸せにし、活性化させる 5. 自然に生まれる株主の幸せ、という順番で、通常「顧客第一主義」と掲げている企業が多いのにも関わらず、あえて「社員」をトップにしています。所属する組織に対する満足度が高く、帰属意識の高い社員でなければ、お客様が満足するようなサービスを提供することが出来ない、という理由からだそうです。

船場吉兆の不祥事では、トップが最初の会見で「現場の社員が勝手にやった」と発言し、責任を社員に押しつけました。その後、内部告発が続出し、ついには倒産する羽目になったのですが、典型的な儲け主義の行く末が老舗高級料亭の哀れな結果になったのかも知れません。

著者は企業の業績よりも継続性を重視しています。ある調査結果によると、賃金や業績がよく、又は、規模の大きい会社ほど社員のやる気やモチベーションが高いか、というと必ずしもそうではない結果がでたそうです。自分の会社が地域社会や多くの人の幸せに役立ち、満足を与えている、というやりがいを実感できることが社員にとって大切なことと著者は言います。

経営がうまくいっていない会社の経営者に話を聞くと、「景気が悪い」「政策が悪い」「規模が小さい」「場所が悪い」「業種が悪い」「いい人材に恵まれない」・・・など、問題は外部にあるということを言いがちで、出来ない理由はいくらでもあげられます。しかし著者は、経営の悪化要因はほとんど企業の内部要因であると言い切ります。好況を持続させるのも「人財」ならば、不況を克服させるのも「人財」であると言います。本の中で紹介されている株式会社 樹研工業の松浦社長の言葉が印象的です。「今の若者はタイミングよく心に火をつけてあげれば、ガムシャラに勉強し働くのです。彼らのそういうことを引き出すような雰囲気を用意するのが、会社の、経営者の役割でしょう」。

本では1.2巻合わせて13社の代表的な企業を紹介していますが、すべてに共通しているのは、「社員を信じ、かつ、大切にしている」ということです。トップで紹介されているのは、私が昨年2月にこの紙面にご紹介した、社員の7割が障がい者でありチョコレートの生産シェアが30%ある「日本理化学工業 株式会社」です。何度読んでも感動する涙なくして読めない内容です。

しかし、言うは易く、美談の陰には失敗や人に言えない、本の記事には出てこない苦労があるのも事実だと思います。会社は誰のためにあるのか・・・、改めて考えさせられますね。経営指針のヒントになればと、経営者にはぜひ読んでいただきたいお薦めの本ですよ。